# 文学の杜

## 仙台文学館友の会会報

第49号
平成27年11月30日発行

仙台文学館友の会（仙台文学館内）
〒981-0902
仙台市青葉区北根2丁目7の1
電話　022（271）3020
仙台文学館のホームページ
http://www.sendai-lit.jp/

晩翠忌記念行事

## 「詩と音楽のひととき」

# 秋の午後、大正ロマンに包まれて

10月18日、第56回「晩翠わかば賞・晩翠あおば賞」の贈呈式の後に行われた記念行事、今年は在仙の音楽家おふたりによる「大正ロマンをうたう」だった。

開演時間、文学館1階のエントランスホールは用意された椅子が足りない程の満員である。展示中の竹久夢二ファンだろうか中高年層が多いが、最前列には今日の歌姫お目当てと思われる若い男性の姿もあった。

ピアノの榊原光裕さんは、白いシャツのシンプルな出で立ちで登場、控え目にして爽やか。実力はすでに十分知られている人である。

黒の舞台に良く映える薄いピンクの着物姿で現れたヴォーカリストの庄子眞理子さんは、大きな花柄の帯を「銀座結び」というゆるいおたいこにし、黒髪の肩のあたりに白の椿をさしてお出まし。多めに見せた刺繍の襟にも時代の香りが立ち、まさに夢二の描く女性を見るようであった。司会をする文学館伊藤美菜子さんが手にしているノートにも赤い椿の描かれた黒の表紙がかけられ、気分は早くも大正ロマンの世界である。

一曲目は、この日を記念する「荒城の月」。絹のようなと言えばいいのか、美しいソプラノだった。硬質な歌詞が思いがけなく華やかな色彩をまとって目の前を流れている。カチューシャの唄・ゴンドラの唄と大正時代の歌謡曲が続き、浜千鳥・叱られてなどの童謡が数曲心を込めて歌われた。体をゆすって聴く人がいる。遠くなった時代をなつかしんでいるのだろうか。

榊原さんのピアノソロ演奏は、オペラ「カルメン」で耳に馴染みのあるハバネラの歌・オペラ「ペールギュント」のソルヴェジの歌など外国の楽曲で、庄子さんの歌う日本の歌と対照的な選曲のように思われた。

あっという間の40分。最後は夢二の詩になる「宵待草」の独唱。終わって拍手がしばし鳴りやまず、「赤とんぼ」の合唱がアンコール曲となった。

晴れ渡った秋の午後、大正ロマンにひたった心地よいひとときだった。

なお、晩翠忌記念行事として吉岡一男氏講演会「土井晩翠と明治の旅」（10／12）と「杜の都にひびけ荒城の月市民大合唱」（10／19）も実施されました。（佐）

### 第56回 晩翠わかば賞・あおば賞

晩翠わかば賞・鈴木蒔登さん（仙台市）
晩翠あおば賞・漆澤好美さん（宮古市）

仙台が生んだ詩人土井晩翠を顕彰するための第56回晩翠わかば賞あおば賞の贈呈式が、10月18日、仙台文学館で行なわれた。

晩翠わかば賞は、仙台市立東二番丁小学校1年鈴木蒔登さんの「よふかし」。晩翠あおば賞は、岩手県宮古市立第一中学校2年漆澤好美さんの「空」に決まった。応募作品は東北地方と仙台市国内姉妹都市である大分県竹田市の小・中学生から、総数784編。ほかに優秀賞に選ばれたのは以下のとおり。晩翠わかば賞優秀賞は、宮城県亘理町・後藤流希さん、宮城県登米市・芳賀祐月さん、宮城県登米市・渡邊遥輝さん。晩翠あおば賞優秀賞は、仙台市・永浦麻衣さん、仙台市・鈴木空さん、仙台市・松本夏子さん。

## 文友一滴

仙台文学館の正面入口に近い池の端に、メタセコイアによく似た木が数本植えてある。水辺を好むというヌマスギだろうか。木のある場所は気持ちが落ち着く。並木なら更にいい。

川内の宮城県美術館から仙台国際センター方面へ向かうまっすぐな道、右手上の東北大学の敷地にメタセコイアの並木が続いている。若葉の芽吹く春は萌黄色。夏の盛りは深緑。秋になると赤銅色に紅葉し、初冬には葉を落とした枝がレースのような透かし模様を空に映し出す。真冬、裸木にうっすらと雪を載せた大木のたたずまいは無言の強さを見せる。円錐形の樹冠は春夏秋冬どの季節にも静かな安定した美しさを保ち、毅然とした大きな木なのに決して圧倒する気配をみせない。大好きな並木である。最近、誘われて行った東北大学の萩ホールでも、広場にメタセコイアの並木を見つけた。

百万年前に姿を消したと考えられていたこの木は、昭和16年日本の植物学者三木茂がその化石を発見し命名した。同年中国で原生する木も発見され新種登録されたのだという。昭和25年、アメリカの科学者チェイニーによって種から苗木が育てられ、100本が日本に贈られた。そのうちの3本が東北大学に分配されて学内に植えられ、後に「仙台市の名木」として登録されたという。（『メタセコイア』斉藤清明著・中公新書）

この本を読んでから、大学の美しいメタセコイアの並木は65年前の3本の苗木と関係があるのではないかと想像している。優しくそよぐこの大木の並木が仙台の街にもっとあったらどんなにいいだろう。ケヤキ並木と共に杜の都の象徴になりそうな気がする。

サクラ、イチョウ、プラタナスなど並木は落葉樹が多い。季節によって一斉に衣を着替えた時の驚きがまたうれしいのである。（佐）





# 多彩な芸術世界を味わう

## 竹久夢二展、仙台とのかかわりも

仙台文学館で9月から11月にかけて開かれた竹久夢二展では、夢二の芸術世界と彼の生きた明治末期から大正、昭和初期までの時代をたっぷり味わうことが出来た。美人画をはじめとする肉筆画、版画、詩、写真などからは大正ロマンと言われる時代の気分や生活臭が生き生きと感じられた。

当時もモボ、モガなどと自由で新しい風潮があったにしても、何事にもドライな現代から見ると、ずいぶんウエットで情緒豊かな世界である。社会や経済、生活スタイルなどの違いだろうか。人間関係が手紙や面会によるものから携帯電話やメールへと変わったせいだろうか。いろいろ考えさせられた。

画家としての夢二では、省略された少ない線によって人物や物の本質、特質を見事に浮かび上がらせる表現力に感じ入った。美人画とモデルになったと思われる3人の女性の写真では、似たところがあるかどうか、しげしげと見比べてしまった。細くてたおやかな女性像は絵の世界だけではなかったようだ。

夢二は本や楽譜の装幀、挿絵など多くのジャンルで活躍したが、一方では日本各地を旅して歩き、欧米まで足を延ばした。夢二の漂泊と、各地で多くの人と交流する行動力に感心した。仙台ともかかわりが深く、天江富弥らの童謡誌「おてんとさん」に作品を載せていたことを知って、夢二が一層身近に感じられた。

関連イベントとして夢二の孫、竹久みなみさんによる講演会、ブックカバー作りのワークショップなどが開かれたが、参加できなかったのが残念だった。（友）

## 恒例の年賀状展

本年度も、文学館主催、友の会共催事業「新春ロビー展100万人の年賀状展」を開催します。今年で第14回を迎える恒例の企画となりました。好きな作家や作品名、作品の一節、自作の詩や俳句、また自由なイラストなどを添えた年賀状作品を募集し、館内でご紹介します。

多くの会員のみなさんに、年賀状作品をお寄せいただき、ご参加いただきますよう、お願いいたします。

## 私と郷土と文学 ⑦

### 飢餓海峡と下北半島

本州最北端下北半島の港町が故郷である。家から数分歩いて浜に出ると、晴れた日には右に塩屋崎、左に北海道南端の山々がかすんで見える。

水上勉原作「飢餓海峡」は、北海道であった火災と青函連絡船洞爺丸の遭難事故をヒントに、殺人者の逃亡と敗戦後の日本社会を描いた小説だ。嵐の海で共犯者を殺した男は、一人小舟で陸奥湾側の浜に上陸する。当初作家は下北の地を踏まず、北海道と下北半島の地図を見ながら書いたという。

昭和四十年に映画になり、数々の賞に輝き今も日本映画史に名を轟かせている。撮影のロケ班が下北に滞在中、地元は「飢餓海峡」でもちきりになった。母はその題名を嫌ったが、私は海の猛々しさを言い当てていると思った。港に上がった死体を見たことがあるからだ。水揚げされた魚と同様に、市場のコンクリートの上に置かれムシロをかけられていた。海は恵みも厄ももたらすものだと感じた。

晩年水上勉は「飢餓海峡」を書き直している。作家に創作のインスピレーションを与えた土地であることが、誇らしくなった。（近田裕子）

**「私と郷土と文学」の原稿募集**
**約600字で会員のみなさまの原稿を募集します。文学館友の会事務局まで、お送りください。**

## 文友の部屋

❋短歌はうたの調べが大事だということを度々耳にして、茂吉の歌を耳で聴こうと思い立ち、新潮社の「斎藤茂吉秀歌」朗読高橋昌也のCDを聞いてみた。すると、目で読んだだけの時よりも歌がすんなり心に収まるような気がした。そして何度聞いてもあきないということを発見した。作品解説を小池光氏が書いておられる。（小林恵子）

**「文友の部屋」の原稿募集**

150字以内で、会員のみなさまの声をお寄せください。おススメの文芸作品や、映画・演劇などを見た感想などジャンルは問いません。イニシャルでの投稿も可です。

## ◆会員情報コーナー◆

▽境数樹さんが代表を務めるみやぎ櫂草子の会は「みちのく櫂草子第16集」を出版しました。

## 編集後記

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第49号をお届けします。

▽そろそろ終活を―と思って、本棚の整理と本の処分に取りかかっている。ところが、大学以来の古い本を手にすると、パラパラめくって拾い読みしてしまう。だから作業はさっぱり進まない。いやはや困ったものである。（友）

▽今年の紅葉はことのほか美しい。拙宅の窓の前の桜木を逆光で見ると、万華鏡を覗いているようだ。仙台文学館の入口の紅葉は紅の着物を着た女性が木登りしているようだった。竹久夢二展を見ての帰りだったせいだろうか。（宇）

▽庭の木に小さな餌台を置いている。雀のいない時に珍らしく四十雀がやって来て、遠慮がちに木の上で様子見をしている。いいのよ、どうぞどうぞ。（佐）

▽文学散歩はいつ参加してもハズレがない。しばらくぶりに出てみたが、やっぱりアタリで、又すぐにでも行ってみたい塩釜。帰り際友の会前原さんの作品をいただいたのも嬉しかった。家を出て物を見て人と話すっていいものです。（一）

▽冬野菜の高値が伝えられた。鍋の季節到来なのにと恨めしくなる。スーパーの買い物客もゆううつ顔に見えるのは気のせいか。（近）

▽『マンザナ、わが町』を観た。笑いながら涙を流す、会場が明るくなっても鳴り止まない拍手、観劇の感動に浸りました。言葉は、人間は信じられると感じて、気持ちが温かくなりました。（和）

## 仙台文学館ゼミナール 「紫式部日記」「万葉集」

# 言葉の世界に見つける知的刺激

仙台文学館ゼミナールは、仙台文学館によって『深い言葉の世界を追求し、知的刺激と発見をめざす』として企画されています。『成熟した読書と表現を究めるカリキュラム』が提供されます。今年度は、近代文学を読み解く、現代文学を探究する、日本の古典に親しむ、表現をみがく、4コース11講座と特別講座で構成されています。

毎年送られてくる案内を見て、私はため息をついていたものでした。「ああ、今年も出席できない」と残念がり、出席できる方をうらやましく思っていたものです。今年、念願が叶い受講することができました。

『紫式部日記』を読む（講師 横溝博氏）、この講座の受講者はほとんど女性で、男性は数人です。会場はほぼ満席の状態、平均年齢は……70代前半でしょうか。紫式部の本音に触れてゆきます。主人である中宮彰子への思い、同僚への皮肉や批判、友人との交流などを読み進みます。その全てが『源氏物語』へと繋がっていくおもしろさに引きつけられました。さらに、職業婦人であるが故の孤独や不安に、今の私達と共通するものを感じました。

『万葉集』を味わう（講師 津田大樹氏）、こちらは男性の受講者も目につきました。20代後半と思われる方もいて、平均年齢は……60代後半でしょうか。巻二の相聞歌を読み進みます。天智天皇から持統天皇の時代、複雑な人間模様が描き出されます。淡く憧れた大津皇子、草壁皇子、共感できなかった石川郎女、学生時代を思い出しました。未だに読みが確定されない歌、読みによって解釈が変わる歌、本当に興味が尽きません。

二つの講座に共通するものは、受講者の講師へのまっすぐな視線です。静かな興奮とでもいうような開講前の時間も、90分があっという間に過ぎてしまうことも同じです。まさに『知的刺激と発見』に満ちた時間を過ごしました。なんという贅沢で幸せな時間だったことか。次のゼミナールを今から楽しみにしています。（和）

## 友の会随想

# 蕃山散策

友の会会員 其田 敏美

仙台市の愛子に居を構え20年になる。おりに触れては周りの変化に気づかされ、古里のような感じになってきた。わが家の二階の窓から蕃山が眺望できる。その蕃山に文学碑があるという。以前から一度行ってみたいと思っていたので、秋のやわらかな陽射しのなか、足を運んでみた。

古刹大梅寺口から鬱蒼とした杉の中の石段を昇ると、「山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に掉させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。」で始まる夏目漱石の『草枕』の一節が刻まれた文学碑が眼に入ってきた。人間関係のしがらみで悩んだ経験は誰にもあるだろう。「智に働けば角が立つ…」は、そうした人の世の常なる感情のもつれを言い得て妙の言葉だ。この言葉を反芻し、「人間関係で悩んでいるのは自分だけではない」と慰められる人は多いと思う。私もその一人だ。

『草枕』を読んだのは高校生のころ、なぜか冒頭の部分だけはよく覚えている。奇しくも身近に、その言葉が刻まれた文学碑があったのだ。これも何かの縁、腰を据え読み返してみたい思いが湧いてきた。

帰りは西館跡に立ち寄った。政宗の長女五郎八姫（いろはひめ）は、家康の子で夫の忠輝が改易・配流されると、仙台城に戻って来る。キリシタンだった五郎八姫は、運命に翻弄された半生から少しでも遠ざかり、静かに信仰の生活ができる、ここ蕃山麓の西館に移り住んだと伝わる。新しい杜の都づくり青葉区協議会発行「五郎八姫物語」には四季折々の蕃山の自然や、「人に求めず、人に与えよ」の五郎八姫の生活の様子が描かれている。

気のせいだろうか、その場所に佇み風に吹かれると、登場人物、自然の息づかいが伝わってくるようで、一冊の本がより味わい深く感じられてくる。半日ほどの散策だったが、文学・歴史を感じさせてくれた蕃山を振り返りながら呼吸を整え、家路についた。





秋の文学散歩

# 鬼房の小径、句碑は小熊座の配置

## 塩釜の文化を知るちいさな旅

文化の港シォーモ（塩釜）を文学散歩してきた。10月29日は朝から秋晴れ、遠足気分でルンルン。総勢15人。仙台から東北本線でわずか15分で行ける、行ったこともある、いつでも行けるとの理由からか参加者が少なかった。でもでも塩釜は、かつての港町の繁栄の歴史を大事にしながら、すばらしく文化的な発展をしていて見どころいっぱい。

まずは「長井勝一漫画美術館」を見学。彼は塩釜出身で『月刊漫画ガロ』の初代編集長だった。発刊した『ガロ』から次々名作が生まれ〈漫画編集の神様〉と称された。この功績をたたえるために開設されたのだ。漫画本『ガロ』はもちろん関係資料を寄贈していただいた経過をやさしく、ふかく、おもしろく話してくれた渡辺誠一郎さん（俳人）の話術は巧み。漫画文化の一端に触れてなぜかほっとさせられた。

加えて美術館が入っている建物がすばらしい。「エスプ塩竈」は女性設計者で曲線をふんだんに使い、どの部屋ものぞけてどの階からも見渡せるオープンスペースがいい。光も入る。屋上には水の流れる公園があり、建物の隣には写真家平間氏提供のツリーハウスがあって登りたかったな～。佐藤さとるが書いた絵『おおきなきがほしい』を思い出した。

当日メーンの「鬼房の小径」は戦後を代表する塩釜ゆかりの俳人・佐藤鬼房の句を刻んだ石碑が塩釜神社の西側の一画に並んでいた。石碑は小熊座七つ星の間隔に配置しており、丸森石が使われている。関わった渡辺さんは小熊座の編集長であり鬼房の弟子でもある。熱のこもった解説で17文字の世界にひきつけられた。

昼はやっぱりおいしい食事と懇談。浦霞酒蔵隣にある「割烹中長」で。次に来る時はお酒も添えてね。と陰の声。

坂が多くて道の狭いところをバスで「杉村惇美術館」へ。見たことのある建物だ。今は無い仙台のレジャーセンターと似た造り。講堂はアーチ型で懐かしい。2階に作品があり黒を多く使った静謐で重厚な作品に見入った。

地元塩釜の数々を記憶遺産にしようと活動している渡辺さんの労苦。話す笑顔に地元への深い愛が伝わる。4キロ四方のこの街をもっとゆっくり巡り歩きたい。（一）

鬼房句碑の前での記念撮影

第22回読書会（10月14日）

# 共感を得たロールパン

## レイモンド・カーヴァー「ささやかだけれど、役にたつこと」

アンは土曜日に息子スコッティの誕生祝ケーキをパン屋に注文する。ところが月曜日にスコッティが車にはねられ、意識不明となる。夫ハワードと看病するが結局病院で亡くなる。ケーキは引き取られないままとなる。こんな状況の中で不可解な電話がアン夫妻を襲う。

感想はまずこの辺りの違和感に集中した。

・アン、ハワード夫婦の関係希薄なこと。

・パン屋とアンのずれている人間関係。

その様子はパン屋が掛けて来る電話で表現している。登場人物の行動と読み手の日常の感覚との隔たりが違和感を醸し出している。読者はこの違和感を抱え、多少いらいらしながら結末へ突入する。

電話の主がパン屋であることにアンが気付き、パン屋に押し掛ける。そこで一悶着のあと、子供の死を聞いたパン屋が驚愕し、悪意のある電話を反省し、暗い自分の過去を切々と語る。そのうちにお互いに共感し、パンを喰い、夜明けまで語り合う。

〈多くの感想〉読み始めは違和感を覚えたが結末で感動し、題名の「ささやかだけれど、役にたつこと」も分かった。出席13名。新会員1名。（宇）

**次回読書会**は12月9日㈬14時

レイモンド・カーヴァー「大聖堂」（村上春樹翻訳ライブラリー「大聖堂」中央公論新社もしくは、「レイモンド・カーヴァー傑作選」中公文庫）

※参加者は会員に限らせていただきます。申込みは友の会事務局まで。